

第 321 回研究報告会（4月 19 日）  
「緑の回廊」づくり—百年の大計の試み—

佐藤孝則

1. 「緑の回廊」づくりのさまざまな実践例

(1) 林野庁が提唱する「緑の回廊」

林野庁が進める「緑の回廊」の目的は、分断された動物の保全と遺伝的多様性の確保のためにふさわしい森林を適切に維持することである。方法としては、森林整備の必要がある場合には植生に応じて下層植生を発達させたり、裸地化の抑制を図り、「緑の回廊」全体を針葉樹や広葉樹に極端に偏らない樹種構成、林齢、樹冠層等の多様化を図るための森林施業を実施することとしている。森林生態系の構成者である野生動物の移動経路を確保し、生息地の拡大と相互交流を促すことが多様性の保全において必要とされている。

そこで、原生的な天然林や貴重な野生動植物の生息・生育地等を保全・管理するため、保護林を設定し、それらを相互に連結して「緑の回廊」とし、野生動植物の移動経路を確保するための効果的な森林生態系の保全を図っている。

(2) 京大がアフリカで進める「緑の回廊」

西アフリカにギニア、リベリア、コートジボアールの3国の国境に囲まれたニンバ山（標高 1,720m）がある。1993 年、京都大学の研究チームが野生チンパンジーを調査した時、この地域で4～5 群を確認したが、その後密猟などで激減したという。ちなみにこの山は、ユネスコの世界自然遺産に指定されている。

ニンバ山に生息するグループとは別の個体群が、西へ4 km 離れたギニア共和国のボッソウ地域で生活を続けている。この生息地は、今では周囲が畑とサバンナに囲まれ、孤立した状態になっている。そして現在は、1 群9 人（現在、チンパンジーを人間のように「人」として数える傾向にある）しか確認されておらず、密猟や近親交配の危険性が非常に高まってきている。そこで、1997 年、京大チームはボッソウとニンバをつなぐ「緑の回廊（GREEN CORRIDOR）」プロジェクトを立ち上げ、4 km 間の植林活動やプロジェクトに関する一般への教育普及活動をおこない、現在もその活動を続けている。

(3) NPO 法人 ボルネオ保全トラストジャパンの「緑の回廊」

ボルネオ島北東部には、ボルネオゾウ、ボルネオオランウータン、テングザル、ギボンなど貴重な野生動物が多数生息する。NPO 法人 ボルネオ保全トラストジャパンは、「緑の回廊」として10 カ所の保護区といくつかの保存林を選定し、野生動物たちの保護・保全活動をはじめた。

保護・保全活動の対象となった地域は、1990 年代からアブラヤシのプランテーション開発が急速に進んだところで、彼ら

の生息地や保護区が分断化されている。そのため、野生動物の生息地や個体数は減少し、遺伝子の多様性も失われている。この活動に対し、ヤシノミ洗剤を製造・販売する日本の企業は、このプロジェクトに対し支援を続けている。

(4) 仙台市が進める「緑の回廊」

仙台市は、市のホームページの中で、「百年の杜づくり」について以下のように記している。「仙台市は、『杜の都』の名にふさわしい豊かな緑に恵まれた街で、市街地に残された緑地と奥羽山麓に至る広大な自然緑地をあわせると市域面積の約6 割が緑に覆われています。しかし、市民生活に潤いを与えているこれらの緑も、都市化の進展とともに徐々に失われつつあり、これまで育てきた『杜の都』を未来に継承することが求められています。」「『百年の杜づくり』は、仙台の個性といえる『杜の都』の伝統に地球環境への配慮という新たな視点を加え、市民・事業者・行政の協働により、これからの100 年で再生し、新しい『杜の都』を創造していこうとする取り組み」だとして、仙台市は市街地の「緑の回廊」づくりを着実に推し進めている。

2. 天理市における「緑の回廊」づくりの可能性

(1) 「緑の回廊」づくりの基本

天理市および周辺域の市街地には、社寺林を除くと、まとまった林地と判断される場所は少ない。住宅地や学校、児童公園、天理教の詰所などには樹木は見出されるが、本数は少なく、緑地帯の体をなしていない。一方、市街地の東に位置する青垣山麓には林地が広がり、まさに“青垣”となっている。この青垣山麓と市街地との間に緑の回廊が造成されると、“緑の潤いのある街”が形成され、緑地帯が防災林・防火林として機能する。このように、「緑の回廊」づくりは、市街地と山麓をつなぎ、防災効果を高める役割を担うと考えた。

(2) 可能性が高い「緑の回廊」づくり

天理市内の和爾下神社、伊射奈岐神社、都祁山口神社の三つの古い神社の社叢林を調べた結果、コジイ、ヒノキ、アラカシが基本樹種であることがわかった。これによって、「緑の回廊」づくりには、これらの「潜在自然植生」を基本樹種とすることが望ましいことが示された。さらに、「山の辺の道」沿いのアカマツやテダマツの種子をニホンリスが食べていることから、マツ類も植栽することが望ましいとも考えられた。とくにニホンリスは、小動物とのふれあいを醸し出すイメージ・キャラクターとして最適ではないかと考えた。

いずれにおいても、豊かな「緑の回廊」には「森林浴」や「緑陰効果」が期待され、それが「緑の回廊」の醍醐味になるのではないかと考えた。そのためには、地域住民、事業者、学校関係者、市職員などが協働して「緑の回廊」づくりに取り組むことが、最善の方策だと考えた。

グローバル天理  
第 20 巻 第 6 号（通巻 234 号）

2019 年（令和元年）6 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 高見宇造  
編集発行 天理大学 おやさと研究所  
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

Printed in Japan